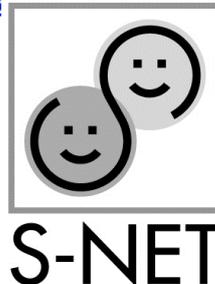


KSK湘南ふくしネットワーク

オンブズマン(新聞)

広報42号

編集責任者：NPO法人 湘南ふくしネットワークオンブズマン 藤本直也
事務所：〒253-0043 神奈川県茅ヶ崎市元町5-22 永井ビル3階
電話・FAX：0467-85-6660 直通電話 090-4937-4904 定価 30円
ホームページ：http://www.npo-snet.com eメール：info@npo-snet.com



2015年度 権利をまもるシンポジウム 開催のお知らせ

さがしているのは 「共に生きる未来」です！ ～地域福祉の明日をめざして～

🎤 シンポジスト

益永 律子さん (特定非営利活動法人
NPO サポートちがさき 代表理事)

田尻 和之さん (車いすの茅ヶ崎市民)

細川 知嗣さん (民生委員児童委員・当法人正会員)



🎤 コーディネーター **高山 直樹**さん (東洋大学社会学部教授・当法人理事)

【日時】2016年2月14日(日) 午後2時～4時半

【場所】茅ヶ崎市役所 分庁舎6階 コミュニティホール

(JR茅ヶ崎駅より 徒歩7分)

***参加費無料/お申込不要(先着150名)**

《詳しくは同封のチラシをご覧ください》



オンブズマン活動について (その3)

今回は、現役のオンブズマン達に、実際の活動で経験したこと、感じたこと、このためにオンブズマン活動は必要なのではないかという事などを書いてもらいました。

チャンネルの一つになり 懸け橋になる

これまで特別養護老人ホーム、知的障害者の入所施設、身体障害者の入所施設、精神障害者のグループホームとオンブズマンを担当したなかで、大事にしていることの一つに、そのかたにとって、想いや声をかけられる“チャンネルのひとつでありたい”と考え活動するということがあります。

ずいぶん前に、『お部屋のテレビの向きをすこし変えたい』との想いを聴きました。やりとりをしているなかで出てきたのは『職員には言いづらいの…』の言葉でした。【すこしテレビ画面の向きを変える】というほんの少しのことをお願いすることを“ためらわずに伝え合える良好な関係性の維持”は、職員のかたがどんなに気をつけていても難しいようです。そのかたは、そのような時

にオンブズマンに相談というよりも、想いをこぼせるチャンネルがあったことで、結果、想いが職員に伝わり、共感し、すぐに対応しやすさ、想いを実現することができました。その時、そのかたは「伝えても大丈夫なんだ」と感じ、職員のかたは「教えてもらえて良かった」と感じられていたようでした。

人は周囲との関係性が同じ相手でも常に同じ状態ではありません。良好な関係性の時は、伝えることが簡単にできることもあります。そうではないときもあります。そのような時に、相談や想いをこぼすことができるように、そのかたにとってのチャンネルとして活動していきたいと思っています。(小野田智司)

揺れながらも根を張っていきたい!

オンブズマン歴3年です。高齢者施設、就労支援事業所、障害者グループホームを担当し、現在も関わっています。



高齢者施設では担当する入居者人数が多く、オンブズマンにゆっくり話をしたいと思っている方がいらっしゃるのに時間に追われて話を打ち切り、失礼することが多々ありましたので、私自身はオンブズマンを担当している間中、きちんと話を聞けたか悩み通しました。各ユニットの職員からは事故、病気、入居者間トラブル、入居者に関する問題などを聞き取るようにし、職員も仕事の手を止めることなく様々な話をしてくれました。しかし、オンブズマンとして入居している当事者の代弁者になり得ていたか、施設の協力員との振り返りの時には権利擁護の点から踏み込んで発言できていたか反省もたくさんあります。

就労支援型事業所やグループホームでは、オンブズマンとの相談を希望された障害者本人から話をきくという方法でした。グループホームでは相談者の自室に入って話をうかがいしたのでその方の好みや生活を感じ取る事ができ、相談者の悩みや訴えを理解するうえで大変参考になりました。相談内容を解決するには関係する人々との取り組みなど多くのステップの必要なものが多く、もどかしさも感じました。

「脱施設」と「施設をパラダイス」の間で揺れながら、少しずつオンブズマンは必要だと感じるようになりました。利用者自身が、市民であるSネットのオンブズマンの心を揺さぶり続け、ノーマライゼーション社会の実現に市民として努力できる原動力となってほしいと思ったからです。(武山育子)



想いを聴き取る

私達が訪問するところでは、言葉が出せない方々や言葉が少ない方々が多くおられます。

A子さんは[うんイイ]と[イヤだ]だけは明瞭な発音です。その日、私達とどうしても話したいという表情で面談に来られました。

[何についての話]かを引き出すために、「通う施設のこと?」「グループホームでのこと?」とお訊きしました。みんな違いました。伝えたいA子さんの眼を良く良く見て、私たちが分かっているA子さんの生活の中のどれであろうかと、私たちが思いつくことを順番に訊ね続けて、結局、A子さんが週一回通っているダンス教室に持って行く靴と服と飲み物を入れるための新しいバッグが欲しいのだということが判りました。

しかし、私たちはA子さんのグループホームのお部屋を訪問したことがあり、A子さんはたくさんバッグを持っている方で、お小遣いは充分ではないことを知っていました。そこでグループホームのスタッフに、A子さんが忘れてあるバッグの中から探して貰うことを提案してみました。でも、A子さんは[イヤだ]と明確に答えました。

オンブズマン同士でその場でどうするか話し合い、これはA子さんの欲しいと思っているバッグの具体的なイメージを聴き取るしか

いだろうという事になりました。(二人で行っている強みです)

大きさは手を広げて訊ねました。段々に広げて行って、[うんイイ]にたどりつきました。今度は色です。私達は持ち物を次々に出して訊きました。A子さんは真剣に見て、違う、違う・・・そして、とうとうベージュ色だと判りました。形は?色々のバッグの形を紙に描いたり、A子さんの身振り手振りで「斜め掛けのショルダーバッグ」と判りました。

A子さんには、11月3日の「市民祭り」にヘルパー外出をする予定になっているので、その日まで待って、バッグを買うのはどうですかと訊ねました。

「うんイイ」という彼女の答えに、グループホームのスタッフに渡すように、紙に[A子さんは11月3日の(市民まつり)のバザーにヘルパーさんと買い物に行き、膝に乗る位の、ベージュ色の、斜め掛けに出来るショルダーバッグを買いたいので、よろしく願います]と書いてそれを読み上げました。「うんイイ」と云ってA子さんは、晴々とした笑顔で手を振って帰って行かれました。

私たちはA子さんの云いたいことをしっかり聴き取ったと安心したのでした。



(佐川美智子)

支援を見つめて

ある施設を訪問した際に、女性の足にとっても興味ある男性がいらっしゃいました。

何度か色々な所で足を触ってしまうような事があったらしいのですが、職員は対応に苦慮していたようで、どのように対応すれば落ち着いて仕事ができるのか、試行錯誤している様子が訪問するたびに感じられました。

目の前のあらゆるものが視野に入ってくると落ち着かないそうですが、ある訪問時に落ちついて仕事ができるようになったとの職員から話を伺い作業の場所を見せて頂きました。

作業能力も高く、目で見る力も強いのでその特性を生かし、気が散らないような環境で作業

が行えるよう、視覚をパーティションや段ボール等を利用してさえぎり、今何をするのかよく解るよう一日の流れを時間で大きく明示して壁に貼ってあり、次は何をするのか順番を目で見て解るよう工夫してありました。

急に予定が変更になる事はなかなか受け入れる事が出来ないようで、本人の納得のいくように話し合い、作業を行っていました。

人としての尊厳を守り、利用者お一人おひとりがその人らしく、豊かな生活を送っていただけるよう障害に沿った支援を提供するという、職員の努力を感じた訪問日でした。

(市川悠紀子)



協働して障害のある人の地域での生活を守る

通所施設のオンブズマン協力員から、「とても残念に思っていることがある。」という訴えがありました。それは、一人の利用者さんが、コミュニティバスを使ってそのバスの区間だ



け一人で通勤できるようになっていたが、そのコースが廃止になってしまい、その利用者さんは家から施設まで施設の車で送迎することになり、一人で街の人達に触れ合いながら通うという事ができなくなってしまいそうだと

いうことでした。コミュニティバスの運転手さんは、職員の「降車のブザーを押せたかどうか」の問いに、本人を目の前に答えるのは良くないのではと、手真似で知らせてくださるなど心遣いをしてくださっていました。

そこで、当法人よりコミュニティバスを運行している茅ヶ崎市都市政策課に大急ぎで「障がいのある人が地域の方々との関わり合いの中で暮らすことが『誰もが共に暮らせる地域社会』の実現につながる」と要望書を出し、コースの存続を訴えました。すると間もなく都市政策課から連絡があり、施設職員と市役所に伺いました。茅ヶ崎市では交通不便な地域があり、そこに「予約型乗合バス」という新しい交通システムを導入するとの説明で、利用者さんの状況を職員から聞き取り、施設の前を100か所以上ある乗合バスの集合所の一つに組み込んでくださったのです。バス区間での一人通勤は今も継続しているそうです。(江崎康子)

はみだしコラム



京都駅から新幹線のぞみの上りに乗り込みました。連休前の金曜日の夕方、指定席は満席。通路を隔てた2つ前の席から赤ちゃんの顔がのぞいています。Tシャツ姿で首にタオルをかけた大きなお父さんの膝の上にはもう一人3歳くらいの男の子が座っています。窓側席の女性はお母さんかなと想像しましたが次の名古屋で降り他人でした。名古屋からは中年男性が座りまた満席となりました。

お父さん一人で赤ちゃんとお子さんを連れての旅の様です。名古屋を過ぎてから男の子の姿勢が崩れ、通路に頭が出たり、足が出始めました。するとお父さんは棚上の紙袋から絵本を取り出し渡すと、男の子の顔に喜びと驚きの表情が浮かび、夢中で本に見入りました。座席のテーブルを開いて絵本を載せ、脇に立たせて見せ、ずっと左腕で抱えていた赤ちゃんをひざに載せました。そのうち赤ちゃんがぐずり出しそうになると、前席の取っ手にかけてレジ袋からビスケットを取り出すと小さく割って持たせました。男の子がしゃがんで床にお尻をつきそうになると、お尻に手を添えて励ますように立たせました。そのうちに抱っこひもを取り出し赤ちゃんを抱っこして、座席に幼児を座らせ父親が立ちました。首に巻いたタオルで赤ちゃんのよだれを拭き取ったり水を飲ませたり、小さな縫いぐるみの車をもたせたり、適当に時間を置いて散歩に出かけていましたが、足音が聞こえない静かな移動です。何度目かの時に男の子がプラコップ、お父さんがペットボトルを持って帰ってきました。早速お父さんがプラコップにお茶を注ぐと、突然男の子が「入れちゃダメ〜エ」と怒り、「パパ嫌いや」と小さなこぶしでパパを何度も叩きます。ちょうど通りかかった車内販売からプラコップをもらって渡すのですが、それも受け付けず、とうとう声をあげて泣き出してしまいました。もう限界だったのでしょ。う。。。さあ、どうするお父さん。。。お父さんは抱っこひもを外し、赤ちゃんを左手で抱え、しゃがんで「おいで」と言ったのです。男の子の手が伸びてお父さんの首に抱き着き、泣き止みました。お父さんは静かに立ち上がり右腕に男の子、左腕に赤ちゃんを抱え、ゆったりとデッキに出て行きました。

新横浜で下車したのでその後を知りませんが、大勢降りたので、その先は気楽に過ごせたのではと思います。お父さんは一度も「静かにしなさい」などの指示的な言葉を出さず、子どもが楽しく過ごせるよう、工夫し心配りをしていたのです。素晴らしい！超イクメン！！

